

言葉でつなぐ魅力的な場の創造を目指した授業づくり

～対話的な学びに着目して～

竹内由美¹・小笠原拓²

¹鳥取大学附属小学校

²鳥取大学地域学部

昨年度の研究から、共有学びにおける対話的な学びにおいて、肯定的な面に着目することの有効性について知見が得られた。しかし、対話が話している当事者同士や学級全体にどのくらい広がり、影響を与え合っているのか、対話をより双方向のものにするにはどうすればよいのかについて課題を残した。そこで、今年度は、対話をより双方向のものにするための手立てと対話を通した子供たちの変容の2点について探っていくこととした。その結果、対話の視点と対話の際の思考方法を明確にすること、学習の進め方やポイントを示した学習手引きが有効であることが分かった。また、グループでの対話を通して、良好な人間関係の構築が図れることも分かった。

キーワード：対話，学習手引き

1 はじめに

1.1 国語科の未来へつなぐ授業づくりの視点

1.1.1 国語科特有の見方・考え方

小学校学習指導要領解説国語編（2018，p.12）において、「国語科特有の見方・考え方とは、『言葉による見方・考え方』である。『言葉による見方・考え方を働かせるとは、児童が学習の中で、対象と言葉，言葉と言葉との関係を，言葉の意味，働き，使い方等に着目して捉えたり問い直したりして，言葉への自覚を高めることであると考えられる。』と明記されている。それは，言葉を見つめて，吟味したり，判断したり，評価したりして理解，表現することであり，言葉を通して自分の思いや考えが形成され，深められていることへの気付きを大切にすることとも言える。様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては，言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている。このため，「言葉による見方・考え方」を働かせることが，国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながる。

「言葉による見方・考え方」とは，子供の様々な考えの表出という短絡的な考え方ではない。単なるイメージや感覚からの表現内容ではなく，「対象と言葉」「言葉と言葉の関係」「言葉の意味，働き，使い方等」というように「言葉を用いた論理的思考による表現内容」を「言葉による見方・考え方」と捉えることが必要である。

1.1.2 国語科が提案する学びのプロセス

(1) 魅力的な導入と見通し

「主体的な学び」の実現に向けて，子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう，単元の導入を工夫したり学習の見通しを立てたりする学習場面を設定する。学習者である子供たちが本単元の必然性を感じることで，単元のゴールを明確にイメ

ージすること、課題解決のための見方・考え方を知ることのできる導入が、子供にとって魅力的な導入であると考え。見通しでは、子供たちと一緒に学習課題を決めたり、学習計画を立てたりする。見通しをもたせることで、子供たちの学びへ向かう力を持続させたい。このような取組が、目的意識と相手意識をもつことになり、課題解決に向かう態度や意欲を支える。

(2) 共有学び

共有学びとは、ペアやグループ、全体で話し合ったり、自分の考えを伝え合ったりして、考えを共有し、自分の考えを広げていく学びである。共有学びでの対話について、青山（2019, P.16）は、国語の授業で見られる対話には、【対象】と【目的・機能】という2つの観点で、それぞれ3つのタイプがあると述べている。対話の【対象】には、①テキスト（教材文や資料）との対話、②他者との対話、③自己との対話の3つのタイプがある。授業で対話を仕組む【目的・機能】には、①自己の考えをつくるための対話、②考えを拡散・多様化させるための対話、③考えを収斂させるための対話などのタイプがある。授業づくりにおいては、【対象】と【目的・機能】という2つの観点について、それぞれ何のためにどのような対話を仕組むかを吟味する必要がある。アメリカ国立訓練研究所の研究によるラーニングピラミッドからも、グループ討議や他の人に教える等のアクティブ・ラーニングの学習定着率は50%以上と高くなることが分かっている。対話的な学びを意図的に仕組むことで、自ら学習に関わる主体的な学びとなり、新しい考えと出合ったり自分の考えを検討し直したりする「考えの形成」が繰り返されると考える。

(3) 振り返り

学習の振り返りでは、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要である。振り返りは、対話についての【対象】の観点③自己との対話、すなわち自己内対話でもある。振り返りの場で、子供の学習に対する考察の視点を明確に示すことで、次の学習活動や自分自身の成長、読書生活などにフィードバックする「主体的・循環的で深い学び」へと導ける。

昨年度の研究では、上記の3つの学びのプロセスを提案した。実践を通して、魅力的な導入が学習意欲の維持に有効であることが分かった。また、共有学びでは肯定的な面に着目することの有効性も分かった。さらに、単元を通して人とつながることが、意義ある学びになるということも分かった。一方で、昨年度の共有学びでは、受信力と発信力に着目したが、発信者側からの一方通行的なものになりがちであった。もっと、双方向で、子供の対話が学級全体に広がるものにしていきたいと考えた。そこで、今年度は共有学びにおける対話的な学びに着目していきたい。

1.2 国語科における未来へつなぐとは

小学校学習指導要領解説国語編（p.11）では、国語科の目標として、言語活動の充実に加え「言葉による見方・考え方を働かせ」という文言が明記され、より実生活、言語生活に働きかけることの重要性が示された。国語科において、「未来へつなぐ」仲立ちをするものは、「言葉」である。言葉による見方・考え方を働かせ、付けたい力に合った適切な言語活動を通じた主体的・対話的で深い学びの実現こそが、子供たちの未来に生きる言葉の力を育むことであり、国語科における「未来につなぐ」である。

また、今回の小学校学習指導要領における国語科の学習内容の改善・充実の1つである「読書指導の改善・充実」は、学習指導要領で目指す資質・能力の1つ「学びに向かう力、人間性等」とも深く関連している。国語科において、「学びに向かう力、人間性等」で目標とする言語感覚を養うことは、一人一人の子供の言語活動を充実させ、自分なりのものの見方や考え方を形成することに役立つ。こうした言語感覚の育成には、多様な場面や状況における学習の積み重ねや、継続的な読書などが必要である。「学びに向かう力、人間性等」の評価の観点「主体的に学習に取り組む態度」について考える際、生涯

にわたり学習する基盤を養う視点をもつことが重要である。このことは、生涯にわたる読書人を育てることをも包含すると考える。

主体的・対話的な学びの中では、学びが、次の学習、友達、自分、日常生活、読書などへつながっていく。そして、試行錯誤しながらの対話的な学びを通して最善解・納得解を追究していくことが、深い学びや未来の自分自身や他者、社会へとつながると考える。

2 問題の所在

小学校学習指導要領解説国語編（p.6）では、PISA2015（平成27年度実施）において、読解力について、国際的には平均得点が高い上位グループに位置しているものの、前回調査と比較して平均得点が有意に低下しているとの分析結果を受け、「情報化の進展に伴い、特に子供にとって言葉を取り巻く環境が変化する中で、読解力に関して改善すべき課題が明らかになったものと考えられる」と指摘している。全国学力・学習状況調査より、言語活動を適切に位置付けた学校の割合は約9割と、言語活動の充実を踏まえた授業改善は図られている。しかし、「活動ばかりで力が付かない」「子供の主体的な学びになっていない」などの声もある。これからの国語科授業には、育成を目指す資質・能力を的確に捉え、質の高い言語活動を通した「深い学び」の実現に向けた、更なる授業改善が期待されている。魅力的な学びの場を創造し、子供たちが「言葉による見方・考え方」を働かせる主体的な学びの実現が重要である。

3 研究の目的と方法

3.1 研究の目的

昨年度の研究からは、共有学びにおける対話的な学びにおいて、肯定的な面に着目することの有効性について知見が得られた。しかし、対話が対話している当事者同士のみならず学級全体にどのくらい広がり、影響を与え合っているのか、対話をより双方向のものにするにはどうすればよいのかについて課題を残した。そこで、本研究では、①対話をより双方向なものにするための手立て、②対話を通しての子供たちの変容の2点について探っていきたいと考えた。

3.2 研究の方法

研究の方法として、①の対話をより双方向なものにするための手立てについては、対話の視点や思考方法、進め方を示した学習手引きの有効性について、対話中の子供の様子や発言、振返りの記述などをもとに考察する。②の対話を通しての子供たちの変容の検証については、学習中の行動観察や子供の記述、学習後の行動観察や子供の記述などをもとに考察する。いずれも、ビデオ記録やアンケートによっても検証する。

4 総合考察

4.1 第5学年単元「物語の構成を考えて本紹介をしよう」の実践から

単元で扱う教材文「世界でいちばんやかましい音」（東京書籍5年上）は、始まりの場面、山場へ向かう場面、山場、終わりの場面の4構成となっている。これは、起承転結とも言い、多くの物語がこの構成でつくられている。第一次では、物語の構成を捉えるよう教材文を学習し、第二次では、子供たちが既読または並行読書してきた図書から4構成の図書を1冊選び、構成に気を付けて本紹介に取り組んだ。この言語活動を通して、物語の構成を捉えること、物語を俯瞰して読むこと、物語の面白さを捉えることをねらった。そして、本紹介の準備にグループや学級全体での対話を設定した。第二次2時間目では、各自が作品との対話をしながら本紹介の準備・練習をした後、グループで聞き合う活動に取り組んだ。友達の反応を見ながら分かりやすく伝えたり、よい点やアドバイスを考えながら共感的に聞いたりするようにした。その際、第一次で学んだ各構成の

言葉でつなぐ魅力的な場の創造を目指した授業づくり～対話的な学びに着目して～

ポイントをまとめた「学習手引き」(図1)やその掲示用(図2)を用意し、話し合いの視点となるよう活用した。グループ活動において、各自の本紹介のよかった点やアドバイスを話し合うことで、より物語の4構成に着目したり、山場の魅力に気付いたりする学びの広がりにつながっているかを検証した。

終わりの場面	山場 (物語の魅力)	山場へ向かう場面	始まりの場面	構成
<ul style="list-style-type: none"> ○ 始まりの場面と対応させる。 かんたんにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 山場での変化を伝える。(かくして話す) 山場での変化が大きいことが、はっきり伝わるように。 聞き手が読みたくなるしつけ(案し方、言葉、工夫) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 出来事を整理する。(三つ五文) 順番を表す言葉(初めに、次に、そして、) どんな出来事が起こったか。 大切な言葉、文は何か。 絶対必要なことを選ぶ。 聞き手が想像できるように。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 時、場所、登場人物の説明をする。 いつ、どこに、どういう人(物)、ものがあつたか。 中心人物についてくわしく、山場でのちがいを明確に。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 紹介すること、気をつけること 気を付けること

物語の構成を考えて本を紹介しよう
本紹介の手引き 五冊目 書名

図1 本紹介の「学習手引き」

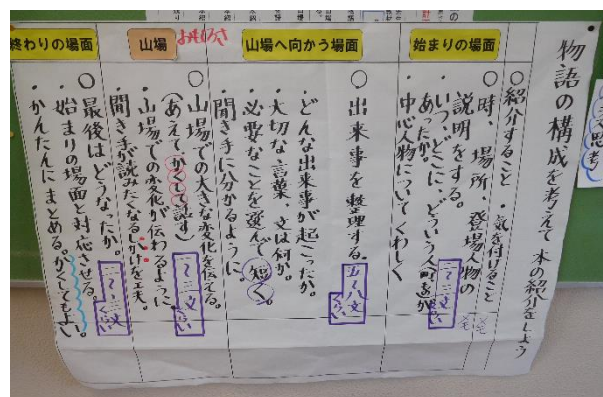


図2 本紹介の「学習手引き」掲示用

4.1.1 単元設定

第一次 「世界でいちばんやかましい音」を読む。(5時間)

- 第1時 教師の本紹介を聞く。教材に出会い初発の感想をもち、単元の学習計画を立てる。
- 第2時 教材文の設定を確認し、7つの場面分けと4構成を捉える。
- 第3時 展開の出来事を読み取る。
- 第4時 山場の王子様の変化を読み取り、その理由を考える。
- 第5時 物語全体を通して大きく変化したものについて考える。

第二次 本紹介をする。(4時間)

- 第1・2時 本紹介する本を決め、本紹介の準備をする。
- 第3・4時 本紹介を通して交流し、単元を振り返る。

※単元を通して並行読書に取り組む。

4.1.2 考察

子供たちは、本紹介に向けてそれぞれ4構成の本を選び、構成を意識した本紹介の準備に取り組んだ。その際、学習手引きの下欄に紹介したいことをメモするようにした。箇条書きでよいことを伝えたところ、上欄に書かれているポイントを参考に紹介文のメモを書き込んでいった(図3)。本紹介の準備では、まずグループで聞き合い、よい点とアドバイスを伝え合った。4~5人と少人数の班のため会話が弾んだ。出てきた意見をホワイトボードに記録し、全体でホワイトボードを見合う時間を取った。各グループでは、主に「始まりの場面の人物紹介が分かりやすかった」「山場をわざと隠す工夫があった」などのよい点、「始まりの場面で、もっと登場人物の説明を詳しくした方がよい」「もう少し短くまとめた方がよい」などのアドバイスが出された。4構成以外の内容、声の大きさと速さについてはよい面とアドバイスの両方の意見があった。全体共有でも、上記の点を確認し、再度自分の本紹介を見直して、全体での本紹介に取り組んだ。話し合いでは、「山場」などの4構成を意識した言葉を使って意見を交わすことはできていたが、友達の本の内容を詳しく知らない場合、内容に踏み込んだアドバイスがしにくい様子が見られた。また、聞き手を引き付けるために、あえて「山場を隠す」という子供たちが見付けた本紹介の工夫に頼り過ぎてしまい、山場での物語が大きく変わった点を詳しく話すことが不十分な子供もあった。

終わりの場面	山場(物語のおもしろさ)	山場へ向かう場面	始まりの場面	構成
<p>○最後はどうなったか。 ・ 始まりの場面と対応させる。 ・ かんたんにまとめる。</p> <p>一文</p>	<p>○山場での変化を伝える。(あえてかくして話す) 一文 ・ 山場での大きな変化が、伝わるように。 ・ 聞き手が読みたくなるしかけ(表し方、言葉)を工夫。</p>	<p>○出来事を整理する。三〜五文 ・ 順番を表す言葉(初めに、次に、そして、…)。 ・ どんな出来事が起こったか。 ・ 大切な言葉、文は何か。 ・ 必要なことを選んで短く。 ・ 聞き手が分かるように。</p>	<p>○時、場所、登場人物の説明をする。 いつ、どこに、どういう人(町、もの)があったか。 ・ 中心人物についてくわしく。 ・ 山場とのちがいをはっきりと。</p>	<p>○紹介すること ・ 気を付けること</p>
<p>メモ 無じ卵をわすれすこと。さるのか。</p>	<p>メモ ・ フルがたにわかれ ・ 足がつかぬ ・ 二つとすけすけつなげ</p>	<p>メモ ・ 月成留りながら妻子をもちるハルイ ・ ミミでクダの家へ ・ トロカイがきて、火の精の卵をわかれ ・ 卵の卵を食す。卵を食いりこ と知る</p>	<p>メモ ・ 用いほうのバルサ、ぜん新ヨゴの ・ 星まをケム命とくう。 ・ 星まにあまの命がさ命なうわかれ ・ いるからにげさ</p>	<p>紹介する本の書名 精霊の守り人</p>

物語の構成を考えて本の紹介をしよう
本紹介の手引き 五年一組三番

図3 子供のメモが書き込まれた「学習手引き」

4.2 第5学年単元「郷土の人に出会う、自分に出会う」の実践から

単元で扱う教材文「手塚治虫」(東京書籍5年下)は、漫画家手塚治虫の伝記である。これまでの伝記学習の課題と解決の方向を踏まえ、子供たちが被伝者と親密な関係を築くことができるようにしていきたいと考えた。また、被伝者と自分とを比べたり、重ねたりして被伝者に関する資料を読ませるようにし、被伝者の言葉、行動、功績、願いや思いなどを知って被伝者について評価すること「意味付けすること」で、被伝者との心理的距離を縮めたいと考えた。そこが、子供たちが被伝者と親密な関係を築くための手立てとして、被伝者として郷土の人物(鳥取県出身者)を取り上げることとした。

対話につなげるため、一人の被伝者を3人グループで調べて人物紹介をするという言語活動を組んだ。複数が同じ被伝者を伝えることで、自分との関連付けや意味付けに違いが出てくると考えた。そのことが、被伝者をより多面的に伝えられるのではないかと考えた。人物紹介にあたっては、「スライドショーとして5分以内に紹介する、スライドは6~9枚、最後に各自が『自分と関連付けた感想』と『被伝者に対する意味付け(〇〇の人)』を伝える」の3点を条件とした。被伝者については、読み物資料の豊富さ、郷土や各界発展への功績といった観点から、遠藤董、米原章三、岡野貞一、北脇永治、古田貞、吉田璋也、伊藤隼三、児嶋幸吉、澤春蔵、足利喜三郎、前田寛治、鬼塚喜八郎、水木しげるの13氏の中から選ぶようにし、最終的には伊藤隼三、足利喜三郎を除いた11氏に決まった。

研究に際しては、第二次第2時に、人物紹介の内容について各グループでの対話を通してスライドショーの項目・内容を考えさせる場を設定した。グループで意見を出し合い、伝える内容を考えていくようにした。また、全体共有として、グループでの活動の課題や被伝者をより分かりやすく紹介するために必要な内容は何かという視点を与えて、人物紹介の内容について共通理解する対話場面を設定した。第二次第1時には、スライドショーで人物紹介をするポイントをまとめた「学習手引き」(図4)を配布するとともに、第二次の学習時間には教室の大型ディスプレイに映し出して常時確認できるようにした。

4.2.1 単元設計

第一次 「手塚治虫」を読む。(4時間)

第1時 郷土の人物クイズに挑戦し、郷土の人物に関心をもつとともに、「手塚治虫」を読み、人物スライドショーのモデルを見て学習の見通しをもつ。

言葉でつなぐ魅力的な場の創造を目指した授業づくり～対話的な学びに着目して～

- 第2時 小中学校時代の出来事を押さえ、人物像を捉える。
 - 第3時 中学卒業後の出来事を押さえ、人物像を捉える。
 - 第4時 読み取ったことをもとに、手塚治虫の生き方について自分の考えをもつ。
 - 第二次 郷土の人物についての資料を読む。(6時間)
 - 第1～4時 興味をもった人物について、人物スライドショーにまとめる。
 - 第5・6時 人物スライドショーを通して交流し、学習を振り返る。
- ※ 単元を通して並行読書に取り組む。

時間	内容
8～7	○人物紹介スライドショー(発表) ・各人人物紹介への質問・感想交流 ・時間ごとに全人物紹介を見た感想交流。(賛否両論、相違点など)
6～5	○スライドと紹介文を作る。 ①スライド作り：写真、文字、シンブルでよい。 ②紹介文を書く：伝えたいことを説明する文章。(一枚二百字くらい) ○○な人理由：自分と比べてたこと
4	○人物紹介の内容を決めよう。 ①グループで意見を話し合って内容を定める。 ○条件を満たす人物像や生き方が分かる。 ○聞き手が分かりやすい。 ②順番を決める。(スライドと紹介文作成)
3～1	○調べたい人物の資料を集めよう。 ○図書資料「インターネット」など。 ○集めた資料や情報をしっかりと読んで、人物について知ろう。 ・人物像や生き方が分かること。 ・出来事、行動、言葉など。

スライド	内容
9	郷土の人と出会う、自分と出会う
8	○スライドショーに入りたい内容を書きましよう。
7	○調べたい人物の資料を集めよう。 ○図書資料「インターネット」など。 ○集めた資料や情報をしっかりと読んで、人物について知ろう。 ・人物像や生き方が分かること。 ・出来事、行動、言葉など。
6	○スライドと紹介文を作る。 ①スライド作り：写真、文字、シンブルでよい。 ②紹介文を書く：伝えたいことを説明する文章。(一枚二百字くらい) ○○な人理由：自分と比べてたこと
5	○人物紹介の内容を決めよう。 ①グループで意見を話し合って内容を定める。 ○条件を満たす人物像や生き方が分かる。 ○聞き手が分かりやすい。 ②順番を決める。(スライドと紹介文作成)
4	○人物紹介スライドショー(発表) ・各人人物紹介への質問・感想交流 ・時間ごとに全人物紹介を見た感想交流。(賛否両論、相違点など)
3	○人物紹介の内容を決めよう。 ①グループで意見を話し合って内容を定める。 ○条件を満たす人物像や生き方が分かる。 ○聞き手が分かりやすい。 ②順番を決める。(スライドと紹介文作成)
2	○人物紹介の内容を決めよう。 ①グループで意見を話し合って内容を定める。 ○条件を満たす人物像や生き方が分かる。 ○聞き手が分かりやすい。 ②順番を決める。(スライドと紹介文作成)
1	○人物紹介の内容を決めよう。 ①グループで意見を話し合って内容を定める。 ○条件を満たす人物像や生き方が分かる。 ○聞き手が分かりやすい。 ②順番を決める。(スライドと紹介文作成)

図4 人物紹介「学習手引き」

図5 グループでの話し合いの記録

4.2.2 考察

子供たちは、人物紹介に向けて班ごとに紹介したい人物を選び、被伝者に関する複数の資料を読み、人物紹介スライドショーの準備に取り組んだ。まず、被伝者について人物像や生き方が分かる点について、出来事、行動、言葉の3視点で各自がワークシートに調べたことを書き出して自分の考えをもった。その後、グループと全体での対話場面を設定した学習に取り組んだ。初めに、グループでスライドショーに入れる内容を話し合わせた。その際、3つの条件を満たすよう手引きを常に参考にするようにし、グループでの話し合いを記録した(図5)。最初、10分程度でよいと言っていたものの、グループでの対話は活発で(図6)、15分ほど要した。対話が活発に行われた要因として、話し合いの視点が「人物紹介の内容を考える」というように明確であったこと、前時に自分の考えを用意していたこと、スライドショー作成に向けての必然性があったことが考えられる。次に、全体共有の時間を持ち、スライドショーにぜひ入りたい内容について話し合った。教師の「人物紹介に入れた方がよい内容はどんなのだろうか」という問いに対して、子供たちの対話が紡がれていった(表1)。そして、被伝者の「言葉」、偉業の「きっかけ」、「上手くいったことといかなかったこと」を入れるとよいことを共通理解することができた。さらに、全体共有を受けて、再度グループで話し合いをもった。振り返りでは、「グループみんなの意見を取り入れて内容を決めることができた」「(全体共有で)Bさんが言っていた意見を取り入れることができた」などの意見が出された。1時間の学習で、11グループ全て6～9枚のスライドショーの内容と順番、作成する担当者を決めることができた。同じ被伝者についての同じ資料を読んでいたため、グループで教え合ったり、再度資料を読み返したりしながら内容を考えて決めていた(図7)。しかし、資料の読取に個人差があり、被伝者について部分的な把握や大雑把な理解しかできていない子供もいた。グループでの話し合い後、スライドショーと紹介文作成に取り掛かった。完成したスライドショーを通して交流し(図8)、11人の被伝者の共通点について全体で話し合った。子供たちは、「失敗や困難に出合ってもあきらめない」「郷土や他の人のために努力している」「歴史を残している」「郷土を愛している」の4つの点に気付くことができた。



図6 グループで話し合う様子



図7 資料を見返しての話合い



図8 第二次第5時の様子

表1 全体共有での話合いの様子

T : これは入れた方がいいと思う内容はどんなのだろうか。絶対入れたい内容は？
 C1 : その人物が語った言葉。
 T : どうして？
 C1 : えっと…。
 C2 : その言葉があって、その人がしていることが実現しているかもしれないから…。
 T : その言葉のおかげで、実現につながったことがあるってということかな。まだある？
 C3 : 仕事をしようと思ったきっかけです。
 T : どうして？
 C3 : きっかけは、必ずあるじゃないですか。絶対あると思うから。
 C4 : その人がどのようなことをして有名になったのか。
 T : した結果、上手くいったこと？いかなかったこと？
 C4 : どっちも。
 C5 : したことに似ているけど、社長とかになったこと。
 T : さっきの意見で、上手くいったこともいかなかったこともって出たけど、どうして上手くいかなかった…失敗したこともいいと思ったのだろうか？
 沈黙
 C6 : 偉人は、失敗してもあきらめないで続けているから、そのことを知ることで性格が分かるかもしれないから。
 T : 失敗した後でどうするかで、人物像が分かるってということかな。
 C3 : 「失敗は成功のもと」ということわざをさっき A さんが言っていたし、失敗は成功につながる、と資料にもあったから必要だと思う。
 T : 成功はもちろん、失敗したことも内容に入れるといいんだね。では、今みんなで話し合ったことを新しいポイントとして見直ししながら、10分ほど話し合おう。

4.3 アンケート結果

子供に実施したアンケートでは、対話について「とてもよい」「よい」と回答した子供が85%であった。対話のよい点については「自分だけでは気付かないことに気付けた」が70%と最も多く、次いで「迷っていたことに自信がもてた」40%であった。さらに、友達と対話をしてよかったと思うこととその理由についての自由記述では、「自分と違う意見を知ることができて考えの幅が広がった」「自分で気付かなかったことに気付かされた」「詳しく知ることができた」「対話を通して新しい考えを見付けることができた」などの肯定的な意見が多くあった。また、グループでは意見が言いやすく、協力して活動に取り組むことに楽しみを感じている子供がいることも分かった。

5 研究のまとめ

5.1 結論

対話をより双方向にするための手立てとして話合いの際の視点（見方）を与えること

で、対話の焦点が絞られるとともに、対話がより活性化した。単元「物語の構成を考えて本紹介をしよう」では、互いの本紹介のよい点とアドバイスに、単元「郷土の人に出会う、自分に出会う」では、被伝者にとっての出来事、行動、言葉に視点を与えたことで、よりよい本紹介や人物紹介に迫ることができた。思考方法について、単元「物語の構成を考えて本紹介をしよう」の本紹介に向けての話合いでは、思考方法（考え方）を明確に設定していなかったため、対話が表面的なものになっていた。しかし、単元「郷土の人に出会う、自分に出会う」では、人物紹介に向けて内容を考える際の思考方法として「選択」を意図したことで、適切な内容を選ぼうと自分の考えを整理しながらグループ内で対話し、活発に取り組むことができていた。思考方法を明確にした対話こそ、価値ある対話になり得ると分かった。学習手引きについては、対話の際に個人やグループがいつでも留意点を確認することが可能となり、対話や学習の道しるべとなった。子供に実施したアンケートで、学習手引きについて「とても役立った」「役立った」と肯定的な回答をした子供が85%であったことから、学習手引きが有効であると考えられる。また、学習後の子供の観察では、学習を離れた場においても学習で同グループであった友達と学習前より仲良くなっていった。このことから、対話を取り入れた学習を通して、友達への理解が深まり、人間関係の横糸が強固に紡がれていくことが分かった。

5.2 課題

今回の研究実践では、本紹介と人物紹介に向けて、グループでの対話場面と全体での対話場面を設定した。本紹介、人物紹介とも、まずは、各自が紹介する本や人物に関する資料を読まなくてはならない。書かれていることを正しく、丁寧に読む力には個人差がある。部分的にしか読んでいない、最後まで読んでいない、大まかにしか読んでいないという子供がいた。また、本紹介のメモや人物紹介について自分が調べたことをワークシートに書き出す際、なかなか進まない子供がいた。読解力を養うこと、主体的な学びにすることへの支援の必要性を感じた。さらに、学習中の発表についてアンケートをとったところ、「自分の考えや意見を進んで発表しようとしていますか」という問いに対して、「あまりしていない」「していない」と回答した子供が約半数いた。個人の性格や発達段階も考慮しなければいけないが、改善への手立てを模索したい。

5.3 今後の展望

子供たちにとって、グループでの対話は心地よいものであることが分かった。今後も、グループでの対話を通じた学びと全体共有での学びを双方向のものとし、学習をより深まりのあるものにしていきたい。そのためには、実践していく中で「聞く」ということをもっと大切にしなければならないと強く感じた。よりよい対話のために、まず、「聞く」ということを浸透させ、取り組んでいきたい。

【文献】

- 青山由紀（2019）対話で深める国語授業，全国国語授業研究会，東洋館出版社 p. 16
小林康宏（2019）小学校国語「見方・考え方」が働く授業デザイン，東洋館出版社
白石範孝（2019）「言葉による見方・考え方の鍛え方」教育科学国語教育，明治図書 No. 837 p. 20
中央教育審議会国語 WG（2016）学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）別添資料
中央教育審議会答申（2016）
中熊豊仁・宮崎幸樹（2016）「伝記」教材を活用して主体的な読み手を育てる国語科学習指導」鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要（特別号 6） p. 117
文部科学省（2018）小学校学習指導要領解説 国語編 東洋館出版社
吉田裕久・水戸部修治（2017）小学校新学習指導要領ポイント総整理国語，東洋館出版社
National Training Laboratories